

- 1 阿蘇瑞枝「万葉集卷十三の編纂私論」(論集上代文学―第二冊)
- 2 前掲論考
- 3 拙稿「万葉の流伝歌」(日本文学論究―第三三冊)
- 4 松田好夫「問答歌」(有精堂、万葉集講座―四)

## 萱 草 小 考

- 5 前掲論考
- 6 阿部武彦「国造の姓と系譜」(史学雑誌五九編―一号)
- 7 狩野久「部民制」(講座日本史―古代国家)

## 引 木 俱 侑

- (1) 万葉集七二七番歌の諸注をめぐって
- (2) 「わすれぐさ」の名義
- (3) 「住吉」と「忘れ草」と
- (4) 七二七番歌の背景

### 一 万葉集七二七番歌の諸注をめぐって

大伴宿祢家持の、坂上の大嬢に贈れる歌二首数年を離り絶えてまた会ひて相聞往

萱草わすれぐさわが下紐つに著つけたれど醜しこの醜草言ことばにしありけり

右の歌に対する最も集約的な解釈は日本古典文学大系本のものであろう。「忘れ草―かんぞう。憂いを忘れるという草。下紐―下裳・下袴の紐。醜の醜草―シヨは強・頑の意。転じて愚鈍の意を表わ

し、罵倒に用いることが多い。言―言葉。ここでは嘘。大意―恋の苦しみを忘れるという忘れ草を、私の下紐に着けたれど、何の役にも立たないバカ草め。言葉ばかりだった。」と頭注に記し、類歌として巻七の「住吉に行く」とふ道に昨日見し恋忘れ貝言ことばにしありけり」と巻十二の「わすれ草垣もしみに植ゑたれど醜の醜草なほ恋ひにけり」とを挙げる。忘れ草―かんぞう。憂いを忘れるという草。大意―恋の苦しみを忘れるという忘れ草を……という直線的な説明解釈は明瞭であるが、それ故妙にすつきりとならない引掛かりが残る。単純に考えると、萱草の音は「カンゾウ」、訓は「ワスレグサ」であるが、真実音と訓との内容が一致しての成語なのであろうか。因に「萱」の国訓は「かや」である。微視的な見方をすると萱草は「かやくさ」と訓んでも支障はないし、内容的にもよくわかる。我は「カンゾウ」を、「ワスレグサ」をどのような具体的なイメージを持つたものとして理解すればよいのであろうか。

古い注釈書を繙いてみると、『万葉代匠記』には  
〔大伴宿祢家持贈〕

萱草吾下紐ル

袖中抄云。鬼ノシコ草トハ別ノ草ノ異名ニアラス。萱草ヲハ忘憂  
草ト云テ、憂ヲ忘ル、草ナレハ、忘草トハ云ナリ。サレハ恋シキ  
人ヲ忘レム料ニ、下紐ニ著タレト、更ニ忘ル、事ナシ。忘草ト云  
名ハ、唯言ニコソ云ヒケレ。猶恋シカリケリ。サレハ此忘草ハ鬼  
ノシコ草ナリケリト云心ハ、鬼トハ実ノ鬼ニハアラス。ワルシト  
云詞也。シコト云モワルシト嫌フ詞ナリ。日本紀第一云。不須也  
凶目汗穢之処云々。醜女ト書テモシコトヨメリ。サレハシコト  
ハワロキ心ナリ。今按、此釈明ナリ。末猶事長ケレト紫苑ソナト  
云無用ノ説、煩ラハシケレバ引カス。第三ニ大伴卿、萱草ワカ紐  
ニツクトヨマレ、第十二ニモサヨメリ。又萱草垣モシミニ殖タ  
レト鬼ノシコ草言ニシ有ケリトヨメル歌、引合テ見ルヘシ。

〔初〕わすれ草わが下ひもにつけたれと わすれ草は萱草なり。第三  
に大伴卿の、わすれ草わが紐につくかく山のふりにし里をわすれ  
ぬかためといふ歌に尺しつ。第十二に又、わすれ草我ひもにつく  
時となくおもひわたればいけりともなし。毛萇か詩伝にも、文選  
嵇康か養生論の注などにも、憂をわするとは有て、紐につくとい  
ふ事は見えねと、本朝の習に、しのひに下紐に著て、しるしを頼  
けるなるへし。鬼のしこ草は、管見抄云。先達紫苑のことにいへ  
る説多し。顯昭法師袖中抄にいへる、そのことは尤可信。鬼は  
かたちにくきものなり。しこは醜の字、日本紀にしこめきゝた  
なき国といへること有。鬼のしこはかさね詞の趣なり。忘れ草と  
いへとも、えわすれねは、きたなき草なりとそしる心なり。今案

第十二に、わすれ草垣もしみゝにうゑたれとおにのしこ草猶こひ  
にけり。

考証実証主義者である契沖の「精撰本」と「初稿本」の七二七番  
歌に対する部分である。初稿本・精撰本ともに「萱草」に対する解  
釈は「わすれ草は萱草なり」・「萱草ヲハ忘憂草ト云テ、憂ヲ忘ル、  
草ナレハ、忘草トハ云ナリ」として、萱草ハ忘憂草・忘草の同一円  
上の理解のあり方を示している。忘憂草にしても忘草も、萱草の持  
つてある効力に対しての意味内容であつて、萱草の実体ではな  
い。先学の上に成り立つ実証認識の方法として当然の帰結の結果と  
も言える。加藤千蔭の『万葉集略解』をみると、

萱草を帯れば憂を忘るといふ事既に出、鬼をおにと訓たるよ  
り、紫苑遠志などといへり、此二つは志をに、をにしのか  
な、鬼はおにのかなにて仮名たがへれば当らず、ここは志この  
志こぐさと訓べき也、さてそれは一草の名にあらず、忘れん為  
に萱草を下紐に著たれどもわすれぬ故に、忘草といふは言のみ  
にてわろき草也と罵ていへるのみ、鬼は醜に通じ用、卷十三か  
がりをらん鬼の志き手をさしかへて、其外志このますらを、志  
こほととぎすなどいふに同じ、

更に「言にし有けり」の例歌として、一一四九・一二一三番歌を  
挙げ、三〇六二番歌を同歌として記している。鹿持雅澄の『万葉集  
古義』には、

歌意は、萱草を身に帯る時は、よく物念を忘るといふ故に、下  
紐に著たれども、そは言のみにて、著しかひもなく、得忘れね  
ば、醜の醜草ぞと悪み罵て云るなり、

岸本由豆流の『万葉攷証』には、

萱草は憂を忘るゝものなりと聞て下紐に付たれども、そのしるしなれば、その萱草をのしりて、醜の醜草なりとはいふなり。

とあり、先人の解釈をそのまま受け継いでいる。早期の注釈である仙覚抄には、

嵇康養生論曰、萱草、亡憂といへり、此歌の意は、萱草愁をわするる志るしあれば、我恋のなげきのいやなくさむるとて、わがした紐につけたれと、其志るしもなし、凶草の、詞はかり也けりとよめる也、鬼のしこ草とは、おにとはおそろしきと云なり、志ことは凶と云詞也。

代匠記・略解・古義・攷証・仙覚抄等から窺えることは、「わすれ草は萱草なり」に同軸を辿ることと、忘れ草の派生的な意味内容及び言葉のもつ雰囲気を含括したものとして忘憂草・忘愁草を捕えていることであろう。考証の集約であることを十分知りつゝも、萱草に対する理解の限界を感じさせる。

亡き人への悲哀の情、生きてあることの深く内面化していく孤独の翳りを、その愁嘆を酒盃に盛ることなく拭い去ろうとして、人は忘れ草に心を托すのであろうか。不意に迸りでる激しい情に身を焦がしながらも、雲の彼の極に放れ居る人への思慕の念を断ちたいと思ふ故に、というよりそう表現するより現わしようのない愛の熾烈さ故に、忘れ草を手にし紐に著けようとするのであろうか。結局は「醜の醜草言にしありけり」の状態へ行き着くだろうことを感じていても、そうせずにはいられない愛の表現のパターンであった。

「醜の醜草」の解釈は、「わろき草也と罵ていへるのみ」「鬼トハ実ノ鬼ニハアラス。ワルシト云詞也」等々に代表される。他の古

注釈本には、「忘草は只萱草也」(『詞林采葉抄』)・「わすれ草くわん草なり」(『万葉集管見』)・「わすれ草とは萱草をいふ也」(『清輔奥儀抄』)・「萱草を鬼のしこくさと云には非ず。鬼と云も醜と云も只凶の心なり」(『詞林采葉抄』)・「鬼のしこくさとは紫遠と申也」(『青葉丹花抄』)・「おにのしこくさ蘭をいふ」(『綺語抄』)・「おにのしこくさは紫苑なり」(『歌林良材集』)とあり、萱草に対しては一致した見解であるが、醜の醜草に関しては、相当期間揺れていた。次に現代の評釈語釈を数点みる。

鋭い詩的直観力に裏付けされた独創的な見解を駆使する土屋文明氏の万葉集私注には、語釈として「ワスレグサ 卷三に見えた。身に附けると物を忘れるといふのである。○シコノシコグサ シコはよくない。卷二にシコノマスラヲがあった」とし、作者及び作意に「家持が坂上大嬢に贈つたものであるが、注によつて、数年の間絶えて再び会ひ、相聞往来したことが伝へられる。坂上大嬢は後に家持の嫡妻となつたらしく見える。忘草を下紐につけるといふのも、事実か歌の上の誇張かは勿論分らない。其の事はいづれでもよいが、歌はただ一通りの物言ひである」と述べ、三三四番歌の語釈に「ワスレグサ 今いふ百合科のクワンザウであるといふ。支那で之を憂を忘れさすものと言ふので、其の考へを輸入して、ワスレグサの名も依つて生じたのであらう」と、万葉集の「萱草」を百合科の「クワンザウ」として具体的な植物名を挙げる。丸山林平氏の『上代語辞典』には「わすれぐさ」を「ユリ科の多年草。葉は硬質、線状。花は黄色を帯び、芳香に富む。各地の山地に産するが、觀賞用としても栽培する。シナで、この草が、人の憂えを忘れさせるといふことから、国語で称したもの。あまな。ひるな。恋忘れぐさ。漢

名で、萱草カシソウ、諼草カシソクと説明し、例に万葉集三三四・三〇六二番歌を挙げる。

『上代語辞典』に遅れること五ヶ月にして刊行された『時代別国語大辞典 上代編』も「かんぞう。ゆり科の宿根草。葉は線状で先端が垂れている。七月ごろ葉間から花茎を出し、黄赤色のゆりに似た花を開く。身につけると憂いを忘れることができるという俗信があった。コヒワスレグサとも」とあり、先に同じ二首の例歌を記載する。現在に至って「萱草」は少しの疑念を残す余地もない程、粉れもなく日ざしの中に露呈されてしまった感じがする。遙か彼方の万葉時代から「カンゾウ」「ワスレグサ」は同質で、「百合科多年草のカンゾウ」であったということになるのではあるが。折口信夫の『万葉集辞典』も佐々木信綱の『万葉辞典』もほぼ同様の記載である。

## 二 「わすれぐさ」の名義

前章で古注釈から現在に至る主な諸本の中で、萱草がどのような理解と認識との範疇にあるかを目的にたりにした。次に、歌的物語的世界を背景とした概念的把握の萱草から離れて、萱草そのものの実体はどのような植物であったのか、考える。『和名抄』には、

萱草 兼名苑云、萱草一名忘憂萱音喧、漢語抄云、和須礼久佐、俗云如三環藻二音

『下学集』も同様に忘憂草を挙げており、『撮壤集』は『和名抄』をそのまま受け継いで、「萱草萱音喧 忘憂草萱草同」とし、更に「療愁草 宜男草」を付け加える。萱草を和名で和須礼久佐と言ひ、音で環藻と読み、悲しみ憂いを忘れさせてくれる草ということから忘憂草というのは既に種々の古注釈の中で理解できる通り、一般的な

ものであった。忘れ草・忘憂草と呼ぶのと同じ概念把握からの成立用語としての療愁草であり、無憂草である。萱草を音で読むことから同音字を充てて「カンゾウ」につくる。「萱草萱本字、萱、蕙草」(『節用集』)・「萱草萱草並同」(『和爾雅』)等の例がある。種々の命名がある萱草の名を『重修本草綱目啓蒙』は挙げて三十四通りの呼び名を教える。列举すると、

萱草 ワスレグサ・シノブグサ・クワンザウ・ヒルナ・ギボキ  
ナ・アマナ・シヤウビ・カツコバナ・トツテコウ・クワンス・  
ニクナ・ヤブニンク・紫憲・益男草・川草花・鶯脚花・石蘭  
兒女花・無憂草・万年韭・婪尾春・忘婦化・仍叱菜・令草・阜  
蘇・雞脚花・合歡花・護堵君子・後庭草・黃鵠嘴・金罌根・緑  
葱・紫萱

この他に、忘憂草・療愁草・宜男草・鹿葱(『節用集』)・蘇(『節用集』)・鹿葱花(『袖中抄』)を加えるなら四十種類もの異名があることになる。更に方言であるギボナキ・アマナ等々を記載したように他地方まで手を拡げて方言名を挙げ、色による命名、形態によるもの、効能の概念化された命名によるものなど加えていくなら、萱草の異名は幾通り存在するのであろうかは想像に難い。『重修本草綱目啓蒙』では萱草の一種として「ヒメカンゾウ」を載せ、「一名キスゲ、ハリマスゲ、和州」と別名を記し、開花時期・花卉形態・花色・食用性等に及び「其他品類多し」とする。『本草綱目』『和漢三才図会』も同じく種類・形態・開花時期・土地柄等を挙げ、微細に渡って具体的に萱草のいかなるものかを説明している。これらのみを見ると、萱草の実体としての植物が捕えられ、七二七番歌の萱草も他の歌中物語中の萱草等すべて形ある実体として、限定された植

物のイメージが具現することになる。しかし、幾種類もの萱草の異名を前にする時、立ち止まらないわけにはいかない。すると、具体的な植物に対するイメージが混乱の度を早めて稀薄になっている。四十種類の種名の中で幾通りの呼び名が同一植物に対して多角度から照射された名なのであろうか。萱草を「カンゾウ」と呼び「ワスレグサ」と呼ぶ方方は、常にどの時世にも同一の植物に付いていた命名であると信じていること自体に誤りがあったのではないかという疑念さえでてくる。この疑念を解決するであろうと思われる重要な資料として次の章に『和訓栞』の「わすれぐさ」の項を挙げる。

### 三 「住吉」と「忘れ草」と

わすれぐさ、倭名鈔に萱草をよめり、わするゝ草とよめるも同じ、忘憂の漢名に本づきたる名成るべし、今音をもてよべり、ひるなとも呼べり、おもふにもと美草を見てうさを忘るゝ意にや、泛く指せる詞なるべし、詩経の意も亦同じ、一草に限りたるは後世の事にや、蔵玉集に葦とも見え、又紫苑をもよみ、俊頼は桜をもよめりといへり、○古き物語に塚墓の上に生ずる草の名也ともいへり、つみもなき人をうけへばわすれぐさおのが上にぞ生といふなる、大和物語に志のぶ草同物のよしいへるは、伊勢物語に別物をわざとこしらへかまへていえるを、取りあやまれる成べし、今関東にて忘草といふは、志のぶに似たる小鳳尾草也、続古今集に、

忘るゝも忍ぶも同じふる里の軒端の草の名こそつらけれ  
とあるは大和物語に据て誤を伝ふるなり、摂州住吉の社に忘草

の神供あり、御厨より献ず、秘して人に伝へずといへり、新後撰集、

墨江の朝みつ志ほに御祓して恋わすれ歌つみて帰らん

『和訓栞』は萱草を簡潔に種々の角度から述べ尽している。右の文章中の次の三箇所注目したい。

(1)おもふにもと美草を見てうさを忘るゝ意にや、泛く指せる詞なるべし……一草に限りたるは後世の事にや

(2)蔵玉集に葦とも見え

(3)摂州住吉の社に忘草の神供あり、御厨より献ず、秘して人に伝へずといへり

(1)(2)は他の古注釈及び辞典類にはあまり記載されていない説である。萱草・忘れ草の何であるかを明確にしようとする志向の強烈さ故に(1)の説は取り上げられなかったのだあろうか。『蔵玉集』による萱草イコール葦説も根拠は奈辺にあるかは判然としないが興味深い説である。(3)に関しては住吉神社の六月晦日の年中行事にその一端が見えている。

戊刻 火替神事、有種々御供備萱草飯ソスレサ以祭住吉開口二十八社大  
小神祇

住吉大神宮年中行事記『神祇金書』『日本  
祭礼行事集成』所収  
『和訓栞』に「秘して人に伝へずといへり」と記していることから知られるように、神社の秘事として境内の外へこの行事の内容は伝わらなかつた『住吉忘草伝』に

当社毎年六月晦日荒和靈御祓神事之硯泉□界宿院へ神輿御幸有  
リテ其日ニ当社へ還御有リ正遷宮終リテ後御供調進ス是レヲ火  
替ノ神事ト云夏ヨリ秋ヘウツルノ謂ヒ別ニ習有リ種々御供有リ



テ忘草ノ御飯ヲ備ヘ住吉開口二十八社大小神祇ヲ祭ルヨシ当社  
年中行記ニ見ヘタリ彼ノ御飯ト云ハ当初草ノ葉ヲ以テ御膳ニ敷  
ク其後深秘ヲ恐レテ止レ之

右の文章から住吉神社の「火替神事」の秘儀が知れよう。注目す  
べきことは、「忘草の神供」(『和訓栞』)・「萱草飯」(『住吉大神宮年中  
行事記』)の内容が「彼ノ忘草ノ御飯ト云ハ当初草ノ葉ヲ以テ御膳ニ  
敷ク」と詳しくみえることである。『和訓栞』・『住吉忘草伝』は近  
世の記録であるが、事柄は秘儀として伝承秘伝される神事故に十分  
古式を保ち続けられていると考えられよう。この『住吉忘草伝』に  
関しては後に再度言及することにして、『万葉集』以降「忘れ草」  
を読み込んでいる歌の世界に目を移す。

『万葉集』から『新統古今集』までのぼうっとすとる程の長い起  
伏の多い時代を、同質の文学意識の継続の観を持って論じることが  
当然徒勞になるが、視点を交えるならば、即ち推移変転する社会事  
象・精神変容の中での変らぬもの、「流行」の中の「不易」なるもの  
を擬視するという作意ならば、多少の意味はあろう。その点にささ  
やかな意義を認めて「忘れ草」を時代の中に眺めると、『万葉集』・  
『古今集』・『後撰集』・『拾遺集』・『後拾遺集』・『金葉集』・『新古今  
集』・『続後撰集』・『続拾遺集』・『玉葉集』・『新後撰集』・『続千載  
集』・『続後拾遺集』・『新千載集』・『新拾遺集』・『新葉集』・『新後拾  
遺集』・『新統古今集』・『貫之集』・『小町集』・『土佐日記』・『大和物  
語』・『伊勢物語』・『千五百番歌合』・『和泉式部集』・『榮華物語』・『素  
性法師集』・『宗于集』・『前大納言公卿集』・『長秋詠藻』・『古今六  
帖』等の歌集の中に六三首載っている。龐大な時の流れに比しては  
僅かであるが、絶え絶えのなかにも延々と脈絡を保ち続けていた

「忘れ草」は、多くの歌人にとって、細々と心の片隅に生きていた  
歌語であったのだろう。あるいは、忘れ草はおびただしい草木の中  
にあつてなお、人々の心に留まり得た何かをもっていたのだとも考  
えられよう。歌う対象は自然の中にも日常生活のふとした垣間見の  
中にも存在するが、人生の通過門のような華やかで艶麗な、時には  
清楚で瑞々しい恋、又冬日の陰りのようにひっそりとした絶望の淵  
の孤独の底へ追い陥れる恋など、あれこれと人生模様を見せて已ま  
ない恋の様相は詠歌の深い関心事象であろう。「忘草」・「恋忘草」・  
「忘貝」・「恋忘貝」等の歌詞は、多くの他の興味事の中に決して埋  
没し終ることのない時代性ともいふべき密着性を持って心に生き続  
け愛された語であるとも言えよう。先に「忘草」の語の入っている  
歌は六三首であると記した。厳密に言うなら、『伊勢物語』・『大和  
物語』・『続古今集』に「忘草生ふる野辺とは見るらめどこは忍ぶな  
り後も頼まむ」の同一の一首が載っている為、實質は「忘草」が五  
四首「恋忘草」が七首の計六一首になる。因に「忘貝」「恋忘貝」  
の方は二四首であり、このうち『万葉集』には十首載る。「萱草」  
は五首であるから数だけ見ると『万葉集』では「忘貝」に対する方  
が、「萱草」よりは関心が高いことにはなるが一概には決められな  
い。『万葉集』は五首とも「萱草」の表記であるが、「忘草」と看  
做して六一首をみると、注目すべきことは地名が読み込まれている  
のは十八首。しかもこの中の十六首はすべて「住吉」・「住の江」が  
地名として歌われる。他の二首は『万葉集』の「萱草わが紐に付く  
香具山の故りにし里を忘れぬがため」と『前大納言公任卿集』に載  
る「忘れ草かりつむ程になりにけり跡も留めぬ鎌倉の山」とであ  
る。旅人の歌は地名としての香具山が詠われているが、「忘れ草を

自分は腰の下紐につける。香具山と萱草とは関係ない。「跡も留めぬ鎌倉の山」や「住吉の岸におひたる忘草」(拾遺・八八八番)のような地名と密着した形での結び付きとは性質を異にしている。「住吉」「住の江」の歌の方に目を移すと、

忘草つむほとと社思ひしか覚束なくて長らへつれば 和泉式部集  
この歌に地名は読み込まれてはいないが、題詞には「すみよしにまでたりける人いとほどへていかがなどいひたるに」とあることにより、住吉と濃い関連があり、地名のある歌と同等に扱っても不自然ではないと思う。次に、

いかにせむ身を住吉の草の名に思倣してや訪ふ人のなき

統千載集

「恋の歌の中に」と題詞のあるこの歌には「忘草」が読まれてはいないが、歌の内容や、直前に載る一五八一番歌の俊成の歌「忘草つみにこしかど住吉のきしにしもこそ袖はぬけれ」と一連のものと思われるので、「住吉の草」は「住吉の忘草」と見なすことができよう。この歌も「恋忘草」と同様にして「忘草」が読み込まれている歌として扱うことが可能ならば、「忘草」に関する歌の総数は六三首となり、「住吉」の地名に関する歌は十八首となる。六三首中十八首までが「住吉」を詠い、一首のみが鎌倉山を詠うとすれば、この鎌倉山の一首は「忘草」の歌に関する限り、特異な孤立無援の存在として例外的に扱うのが妥当だと思われる。十八首以外の残りの四三首の中には、多分に「住吉」に関連するものとそうでないものが混然としているであろうが、地名を詠い込むと必ず「住吉」でなければならぬという事実は重い。何故に「忘草」と「住吉」とは結びつかなければならなかったのであろうか。

道しらばつみにもゆかむ住の江の岸におふてふ恋忘草 古今集

住の江の朝みつ潮に御禊して恋忘草つみてかへらむ 貫之集

忘草つみにこしかど住吉の岸にしもこそ袖は濡けれ 長秋詠藻

過ぎては再び戻ることのできないあらゆる時世を通して、住吉の岸辺は清浄にして神聖なイメージから離脱することの許されない地辺であったと思われる。西の海へ通じる岸辺打つ波は「海若わたつみの神の宮」へも運んでくれるのであろうか。

住吉の沖つ白浪風吹けば来寄する浜を見れば浄しも(万・二五〇)  
住吉の岸の松が根うち曝し寄り来る浪の音の浄らに(同・二五〇)

透く青波に洗われている清浄な海浜という意味の「浄しも」ばかりではないであろう。むしろ、「来寄する浜を見れば浄しも」・「寄り来る波の音の浄らに」の表現感覚の中には、心意気の晴やかな清しさが感じられる。『住吉神代記』を育くんだ葦原の地辺は、万葉のある一時には常世辺にも通じる土地としてのイメージを持たれていたかもしれない。伝説を題材とした『万葉集』巻九・一七四〇番歌の「水の江の浦島の子を詠める一首 短歌并せたり」と題詞のある長歌一首反歌一首は興味深い。「水の江の浦島の子」が「住吉の浦島の子」として歌われる背景には何かの必然性を備えた理由があるうが、現段階においては蓋然性のない推論程度に終りがち故に筆を措くのも已むをえまい。

清浄極まりない地辺としてのイメージを持つ住吉の何処に「忘草」と結びつく原因があったのであろうか。再び住吉神社の内側にもどる。資料が新しいので「忘草」が何であるかを決定しえないが、住吉神社にとって「忘草」はどのように認識されていたかを知一端にはなろう。住吉大神宮若宮別当である源儀の誌した『住吉

忘草極秘伝』には、

御当社ノ御神木ノ松ヲ忘草ト云ハ一社甚秘也 此義ヲ窺奉ル

とあり、忘草が松であることを述べる。傍線部分は一、二行目の行間に割っての書き込みである。この後の二行目から、忘草については説多々ありとして、『住吉物語』・『古今口伝』・『袖下集』・『太平記評判』等を挙げて論を展開する。これらと同様の話を載せている『住吉太神宮秘記』の「和須礼草之事」には、

住吉ノ秘伝萱草ノコトハ古今集草ノ名ノ深秘也古ヨリ人知コト  
ナク或ハ松或ハ卯木ナドヲ以テワスレ草也ト伝フ大ニ誤リ古今  
集極秘ノ伝ニ云昔老岐守良貞ト云人奉勅ヲ住吉ニ詣テ津守ノ浦  
ニ出テ萱草ヲ尋タルニ此浦ニ生タル草ハ山吹ト青木香トノミ也  
良貞イブカリ思テ彼二色ノ草ヲ取テ神前ニ捧テ御神託ヲ聞侍リ  
シニ御帳台ノ内ヨリ

山ふき乃色ハ佐ま／＼匂へとも青き葉をハワ寿礼とハイふ  
トノ玉ヒケレハ良貞□ヒ是ヨリ青木香ヲワスレ草ト定メケルト  
ト

松を否定して青木香を主張する。この二説には何故に萱草が松であり青木香であるのか、動かすことのできない論拠に欠けている為、心に沁む説得力がない。しかし、ここに引用されている『住吉物語』・『古今口伝』等の書物は、既に遙かな昔より、住吉神社でさえ忘草の何であるかを秘密裏に消滅させていたことを物語る。秘儀の口伝がその形骸だけを残し、内容は蒸発してしまったように。松も青木香も忘草であるという証明はない。一方他に、「ワスレグサ」と呼ばれているけれども、その内容の不明なものがある。「忘草の神供」(『和訓栞』)・「萱草飯」(『住吉大神宮年中行事記』)のことは

先に記した。『住吉忘草極秘伝』には「萱草飯」に関して、更に詳しく具体的に記して「火替ノ御神供ヲ忘草ノ飯ト云此ノ御神供ヲ草ニテツ、ミ松ヲ以テ飴奉ル」という。『住吉忘草伝』に見える「彼ノ忘草ノ御飯ト云ハ当初草ノ葉ヲ以テ御膳ニ敷ク」という記事と多少の相違はみせるものの、草の葉で包んでも草の葉を御膳に敷いても、「萱草飯」の行事に草が関連していた事実は動かない。

『住吉忘草伝』は古老の「当社所<sub>ニ</sub>以称<sub>ニ</sub>忘草<sub>一</sub>者則草也」とする口伝を受け、神代記の葦牙に論を発して「此語勢力記神宮ノ秘書鎮座本紀鎮座伝記鎮座次第ニ見ヘタリ故吾神宮葦ヲ以テ忘草ト称メ神祕ノ秘訣トスル者此レガ為ナリ」と忘草の葦説を唱える。「萱草飯」と考え合せると説得力を帯びてくる。

以上の事柄から推論すると、早くから住吉神社内でも萱草<sup>ワスレグサ</sup>が何であるかは口伝裏のうちに忘れ去られてしまっていた。『古今集』より以前の時代から以降、住吉神社と民間(住吉神社に奉仕する人々以外という意味の)との繋がりは忘草を背景として歌枕的感觉であったろう。住吉神社における忘草は早期の頃は葦であったと思われるが、神社内の秘儀のこととして当然神社外には漏れ伝わることはなく、忘草のもつイメージのみが流々として人々の心に沁み渡っていった。それ故、忘草は字義通り、心の持つ苦悩哀しみを取り去ってくれ、懊悩する恋の苦々しさ苦しみを忘れさせてくれるだろうものとして行き渡った。カンゾウでなくともよい。どのような植物でも愛いを忘れさせ、恋の悩みを一時なりとも忘れさせてくれるものならすべて忘草であった。万葉時代頃の忘草はこのような意味で理会することが可能ではないだろうか。呪術的な祈りを託して下紐に小鏡を付けたように(『万葉集発掘』)忘草をそつと下紐に著けたのか



もしれない。

#### 四 七二七番歌の背景

ところで、七二七番歌は家持の何歳頃の作品であろうか。複雑な家族系譜を持つ家持の履歴書は断片的である。年令推定の基準とする記事は二項目しかない。第一は『続日本紀』の桓武天皇延暦四年（七八五年）の条に「中納言従三位宿祢家持死」と載る記事、第二は一五九一番歌の題詞と左注とである。古代氏族の最後の残映とも名づけられる橘家の宴に招かれた天平十年秋八月二十日の歌の左注に載る「右の一首は、内の舎人大伴宿祢家持」の記事が生年を決定させる唯一の手懸り。軍防令によると、「凡五位以上子孫。年廿一以上。見無役任二者。毎<sub>レ</sub>年京国官司。勘<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>実。限<sub>二</sub>十二月一日<sub>一</sub>。并身。送<sub>二</sub>式部<sub>一</sub>。申<sub>二</sub>太政官<sub>一</sub>。檢<sub>二</sub>蘭性識聰敏<sub>一</sub>。儀容司<sub>レ</sub>取。宛<sub>二</sub>内舎人<sub>一</sub>。」とあることにより、家持も二十一歳に内舎人になったとして、内舎人の記載のある天平十年は二十二歳ということになる。家持は養老元年（七一七年）に生れて、延暦四年（七八五年）数え六十八歳で亡くなった。

巻四は仁徳天皇の時代から始って天平年間まで整然と並べられ、年代順になっている。七二七番歌以前に年代の明確に判明する歌は六二一番歌であり、題詞に「西海道節度使の判官佐伯宿祢東人が妻の、夫の君に贈れる歌一首」とあることと、『続日本紀』に「丁酉……山陰道節度使判官巨曾倍朝臣津島、西海道判官佐伯宿祢東人に並に外従五位を授けき」と記載されていることにより、六二一番歌は天平四年（七三二年）の作となる。この年家持は十六歳で、天平五年作の九九四番歌が年代のわかる歌の初出であるから、まだ創作

活動を始めてはいない。因に「大伴宿祢家持の、坂上の家の大嬢に贈れる歌一首」の題詞のある「わが屋戸に蒔きし髪妻いつしかも花に咲きなむ比へつつ見む」（方・二四八）は、後五首目の天平五年癸酉春閏三月の題詞から、天平五年三月以前天平四年にもかかるかもしれない作とも思えるが、明らかではない。最大限そう見ると、七二六番歌は「数年を離り絶えてまた会ひて相聞往来す」とある注により、天平八年以降の作になろう。

二九首に及ぶ家持と坂上大嬢との相聞を短期間の作とみると、十首後に「久邇の京にありて寧楽の宅に留まれる坂上の大嬢を思ひて、大伴宿祢家持の作れる歌一首」と題詞のある七六五番歌の、孤独感とともに忍び寄る寂寥感の中に佇む家持の歌がある。藤原朝臣冬嗣の謀反によって元正前女帝、光明皇后、右大臣橘諸兄等と共に都を離れたのが天平十二年（七四〇年）十月二十九日、家持二十四歳である。伊賀・伊勢・美濃・近江と行宮や郡衙を巡り漂泊して山背国相楽郡の甕原宮に着いたのは十二月十五日のことであるから、七六五番歌を天平十三年（七四一年）に渡るとしても、七二七番歌は天平十二年家持二十四歳から天平八年家持二十歳までの間に作られた作と見える。又巻三の挽歌四六二番歌の題詞に「十一年己卯の夏六月、大伴宿祢家持の、亡ぎにし妾を悲傷みて作れる歌一首」とあり、天平十一年家持二十三歳の時には妻がいた。どのような女性であるかは不明であるが、大嬢と数年離り絶えていたのはこの妻が原因とも考えられる。

亡妻に対する家持の悲しみは深く、砌の上の瞿麦の花を見ては再び歌を作り、また作り、「悲緒いまだ息まず」してまたまた作る家持の心はやりどころがない。亡き妻をあれやこれにつけては想い起

して泣かぬ日は無かった。そんな気持の家持はやがて落ち着く心安らけさを取りもどすと、数年相聞の絶えていた坂上大嬢に大きく傾いて行ったのであろう。七二七番歌以降の家持大嬢の二九首の相聞歌と、久邇京の孤独に打ちひしがれている家持の歌を一連のものとしてみると、前者が華やかな恋の情熱に心たゆとう動の姿勢なら、頻りに寄来す久邇京の家持の歌に対して、沈黙をもってしか答えなかつた大嬢の相聞は静の姿勢と言えよう。そうすると、七二七番歌

は大伴宿祢家持二十四歳（天平十二年・七四〇年）の作である。感受性の激しく起伏の多い青年時代に、忘れようとするとなお燃えあがる想いの情熱をさりげなく萱草に託して大嬢に心を伝えたのだから。熱い恋心を、直接言葉に表わすことなく、するりとかわして歌いあげたところは、数年を離り絶えて再び相聞往来する第一首目としてふさわしい感じがする。

## 古代文学协会会员名簿

昭和四十九年三月一日現在

### 委員

- |       |                 |       |                   |        |                    |
|-------|-----------------|-------|-------------------|--------|--------------------|
| 青木 生子 | 151 渋谷区富ヶ谷一三〇一三 | 市村 宏  | 184 小金井市桜町一八二三    | 大久間喜一郎 | 177 練馬区関町六四三三      |
| 阿蘇 瑞枝 | 170 豊島区東池袋三二七二四 | 伊原 昭  | 151 渋谷区元代々木兜二〇一〇六 | 緒方 惟章  | 252 神奈川県高座郡綾瀬町小園一九 |
|       | ンション二〇二号        | 江野沢淑子 | 154 世田谷区若林二二四一三   | 尾崎 暢映  | 161 新宿区下落合四一三三     |
|       |                 | 寄池マ   |                   |        |                    |
|       |                 | 大久保広行 | 336 浦和市三室二四六      |        |                    |